Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-09

Autism Spectrum Disorder（ASD）のある女子の思春期における課題と支援 ー社会的コミュニケーションを中心にー

西尾，祐美子

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2017-03-25
(Date of Publication)
2019-03-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第6809号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006809

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論 文 内 容 の 要 旨

氏　　名　西尾　祐美子
専　　攻　人間発達
指導教員氏名　鳥居　深雪

論文題目（外国語の場合は，その和訳を併記すること。）

（和文）Autism Spectrum Disorder (ASD) のある女子の思春期における課題と支援
—社会的コミュニケーションを中心に

（英文）Challenges and Support Needed for Pubertal Girls with Autism Spectrum Disorder: Focusing on Social Communication

論文要旨

本論文の主な目的は，Autism Spectrum Disorder（以下，ASD）のある女子の思春期における課題や支援ニーズを整理し，支援の検討を通して臨床的示唆を得ることにあった。

第1章では，思春期における諸問題やASD児・者が示す諸問題を概観し，思春期のASD女子に対する支援の必要性を述べた。ASD女子は問題が内在化しやすく，表面的な行動にASD特性が出にくい。しかし，対人関係などにおける失敗の原因がASDの障害特性によるつまずきであることを周囲に理解されず，失敗体験を積み重ねてしまった結果，うつや不安などの二次障害に至る場合もある。現行の診断基準や評価尺度では女子・女性のASD特性を把握しきれないため，問題がないように見えても適切な支援を必要としていることに変わりない。ソーシャルスキルが高い定型発達女子の平均とASD女子の差は，ASD男子よりかなり大きく，「女性としての」身だしなみがきちんとできないと，友人関係を築く以前に対等な関係にさえなれないのが女子・女性集団の現実である。ASD女子はASD男子に比べて有病率が低く，日常生活においてはなかなか同じASD特性をもつピアを見つけにくいという難点もある。さらに，思春期は二次性徴による身体的変化や心理的変化に伴い，様々な問題を生じやすい。進学や就労による環境の変化，友人関係や親子関係の変化なども生じるため，思春期に直面する課題は多岐にわたる。したがって，思春期のASD女子に対する支援の必要性は非常に高いと推察された。

第2章では，ASDの歴史的変遷や障害の捉え方の変化，ASDの障害特性，ASDにおける性差を整理した。近年，障害は，疾患あるいは変調のみに起因するものでなく，環境因子，個人因子との相互作用により生ずるものとする社会モデルにより捉えられるようになった。ASDの診断基準は，①社会的コミュニケーションと文脈に従った社会的相互障害（以下，社会的コミュニケーションの障害），②行動，作用の持続的な興味，活動の，限定された，パターン的な繰り返し（Repetitive and Stereotyped Behaviors：以下，RSB）の2つである。現在はこれらの症状の背景に，心の理論の障害仮説，実行機能障害仮説，弱い中枢性統合仮説の3つの主な心理学的仮説が関係すると考えられている。また，社会的コミュニケーションの障害に明確な性差は示されていないが，RSBについてはASD女子の方がASD男子より目立たないという研究結果が一致している。

第3章では，社会的コミュニケーションスキルに関して，上位概念であるソーシャルスキルの定義や，ソーシャルスキルの指導法であるソーシャルスキルトレーニング（Social Skill Training：以下，SST）について説明を行った。Gresham（1988）によれば，ソーシャルスキルのつまずきは，妨害要因のない場合，必要なソーシャルスキルが未獲得で，それをどのような手順で実行したらよいかもわかっていない「ソーシャルスキル欠如」と，行動レパートリーの中にスキルが存在するものの，必要な場面でそれを使用することが少ない「社会的実行欠如」に分類される。近年，年齢や性別，障害の有無に関わらず，将来に向けたソーシャルスキルの向上が注目を集めており，臨床場面に留まらず学校教育などにおいても幅広くSSTが行われている。

第4章の研究1では，同年代の定型発達（Typically Development：以下，TD）児との比較や思春期という発達年齢，性差の視点から，ASD女子の思春期における課題や支援ニーズを包括的に捉えようと試みた。小学校5年生から中学校2年生のTD男女330名およびASD男女43名を対象とし，必要な支援内容や誰に支援を求めるのか把握するため，悩み経験や重要度（自分にとって何を重要と捉えているか），関係性の移行，悩みの相談相手に関する調査を行った。結果，TD児は小学校5年生から6年生にかけて親から友人へと関係性の移行が進む一方，ASD児は関係性が友人に移行しにくいことが示された。悩みの相談相手についても，母に次いでTD児は友人，ASD児は父と先生を多く挙げた。このような関係性の移行の違いが見られた要因として，ASD児は社会的コミュニケーションの障害などから仲間関係を築くのが難いことが考えられる。ASD女子は，ASD男子よりも友人関係に対する動機づけが高い（Sedgewick et al., 2015）が，思春期女子の友人関係は複雑性を増す。そのため，友人との関わりを望んでいるものの，うまく関係を築くことができないASD女子の困難が窺える。また，ASD児は友人関係が乏しいと，TD児が友人関係を通して学ぶようなスキルの学習機会が少なくなってしまう。以上より，思春期におけるASD女子の友人関係を支援する必要性が窺える。

悩み経験の有無や重要度は，性差の方がASDの有無による違いに比べて顕著であった。ASDの有無に関わらず，女子は男子より「健康」，「見た目」，「友人関係」の悩み経験が多く，「見た目」と「性格」を重視していた。性差やASDの障害特性に基づき，「女性として」求められる身だしなみやマナーに加え，思春期女子の心身の健康に影響を及ぼす月経の管理が支援ニーズとして挙げられた。以上のように，研究1より ASD女子の思春期における課題と支援ニーズとして「見た目」（身だしなみ），「健康」（月経の管理），「友人関係」が見出された。

第5章の研究2では，思春期のASD女子を対象とした支援プログラムを作成，実施し，社会的コミュニケーションの改善を図った。小学校6年生と中学校1年生のASD女子7名を対象に，1回90分で全7回の社会的コミュニケーション支援プログラムを実施した。毎回，ワークシートを用いて知識としてスキルの獲得を図った後，スキルの実践場面を設けた。プログラムの作成，実施に際してはASDの障害特性だけでなく，思春期特有の心性や性差も考慮した。内容は，研究1で得られた思春期におけるASD女子の支援ニーズをもとに，「話す・聞く」，「食事・お茶会のマナー」，「メール・インターネットのマナー」，「同性・異性との付き合い方」，「月経」，「プライベートゾーン」，「清潔保持」，「身だしなみ・ファッション」，「自己理解」の9つのテーマで構成し，これらは「会話」，「身だしなみ」，「セルフアドボカシー」の3つに大別された。効果に関しては，①スキルを知識として獲得したか，②スキルを使用あるいは般化し

たか，③日常生活における適応状態が変化したか，④効果への影響因という観点から，量的手法と質的手法の双方を用いて検討を行った。結果，本プログラムを通して，スキルを知識として身につけることは可能であった。中でも，月経の管理や清潔保持など「身だしなみ」のスキルは，知識の獲得がスキルの実行，般化に結びつきやすいことが示された。一方で，知識として獲得し，必要性を理解していても，興味関心の偏りやこだわりによりスキルの実行が阻まれてしまうため，ASDの障害特性のうちRSBが社会的実行欠如の妨害要因となりうることが示唆された。

また，ASDの障害特性を考慮した個人因子へのアプローチと子どもが安心して参加できる環境因子へのアプローチを行ったことは，本プログラムで子どもが自立して活動に取り組んだことへの影響因となっていた。さらに，本プログラムは日常生活であまり出会えない，自分と同じASD女子という仲間と出会う機会にもなった。

第6章では，本論文で導かれた結論をもとに，ASD女子の思春期における課題と支援に関する臨床的示唆について考察し，方法論上の問題や限界も言及したうえで，今後の研究課題や展望について述べた。本論文では社会的コミュニケーションを中心にASD女子への支援を検討したが，実際にはRSBがスキルの実行に大きく関わっていた。これまで，ASD児・者に対しては主に社会的コミュニケーションの障害に焦点を当てた研究や支援が行われており， RSBに直接アプローチしたものは少ない。RSBの説明仮説としては実行機能の障害や中枢性統合の弱さが考えられ，社会的コミュニケーションの障害とも無縁ではない。ASDの診断基準である社会的コミュニケーションの障害とRSBはそれぞれ独立した問題として捉えられがちであるが，互いの関連や影響，双方に対する包括的アプローチについて検討していく必要がある。また，ASD女性は，ASD男性よりもRSBが軽症であるという結果が多くの先行研究で一致している。しかし，RSBはスキル実行の妨害要因となり，社会的コミュニケーションにおける困難にもつながる可能性が示唆された。今後はASD女子・女性特有のRSBの表現型や問題，介入方法についても検討していくことが望まれる。

本論文の課題として，①ASD女子のデータ数を追加し研究を積み重ねていくこと，②作成した社会的コミュニケーション支援プログラムのパッケージ化，③ASD特性だけでなく認知特性などの個人因子に焦点を当てたオーダーメイドの個別プログラムの作成，が挙げられる。今後の展望としては，ASD女子自身への支援を検討するだけでなく，ASD女子・女性が生きやすい社会の実現に向けて，TD児・者の障害理解に対するアプローチや社会全体への啓発も行っていく必要がある。

［課程博士用］

論文審査の結果の要旨

氏　　名	西尾　祐美子		
論文題目	Autism Spectrum Disorder (ASD) のある女子の思春期における課題と支援 －社会的コミュニケーションを中心に－		
判　　定	合　格・不　合　格		
審査委員	区　分	職　名	氏　　名
	主　査	教授	鳥居　深雪
	副　査	教授	吉田　圭吾
	副　査	教授	木下　孝司
	副　査	教授	坂本　美紀
	副　査	准教授	赤木　和重

要　　旨

本論文では、知的障害を伴わない自閉スペクトラム症（High Functioning Autism Spectrum Disorder：高機能ASD）の女子を対象に、思春期における課題と支援ニーズを整理し、支援方法を検討したもので、以下の６章から構成されている。

第１章、第２章では、ASDについて診断基準や原因論の変遷を概観し、最新の社会モデルとしての捉え方に至るまで、先行研究を概観し、本研究の目的を設定している。

第３章では、社会的コミュニケーションスキルの先行研究から、ASDにみられるつまずきについて分析的に検討し、障害特性がスキル学習、実行の妨害要因となる可能性を指摘した。

第４章では、思春期における諸問題を概観した上で、ASD女子特有の問題について検討した。思春期には第二次性徴の出現にともない、定型発達では「第２の個体化過程」として、親からの心理的分離が進むとともに友人関係や異性愛などが出現し、関係性が移行していく。しかし、ASD児では関係性が友人に移行しにくい。このことを、小５から中２の定型発達児330名（男174名、女156名）とASD児43名（男23名、女20名）を対象に行った質問紙調査の結果から明らかにした。また、ASDの有無を問わず、男子よりも女子の方が友人関係等に悩んだ経験が多いといった性差が認められた。この結果から、ASD女子の思春期における支援ニーズとして、友人関係、健康、女性としての身だしなみなどがあると整理した。

第５章では、研究１の結果をふまえ、社会的コミュニケーション支援プログラムを開発し、７名の思春期の高機能ASD女子を対象として有用性を検証した。ASDの主要な心理学的仮説である、「心の理論」の障害、実行機能障害、弱い中枢性統合をふまえて開発を行った。さらに、ASDの特徴として般化の困難があるため、プログラムの構造の中に、般化のためのステップを組み込んだ。本プログラムの有用性として、ソーシャルスキルの知識の獲得が確認された。プログラム中の行動観察記録を分析し、ASD女子のソーシャルスキルの実行欠如の妨害要因として、興味関心の偏りやこだわり（RSB）があることを認めた。

第６章では、以上の結果から、ASD女子に特有のニーズを実証的に整理し、ASDの障害特性の観点からRSBの説明を試みた。今後ASD女子の支援を行う際には、RSBの影響もふまえてアプローチする必要があることを示した。

本論文について、以下の５点から審査を行った。

１．独創性：女性の高機能ASDの問題は、国際的にも注目されている。しかし、高機能ASDの場合、有病率の男女比は5.5：1で圧倒的に女性が少ないため、先行研究も思春期に限定すると、数名での実践のみである。本論文は、思春期の高機能ASD女子を対象とした実証的研究を行った点で高い独創性を有しているといえる。

２．当該専攻分野における専門的・学術的価値：高機能ASD児の思春期に特有の心性を、心理学的な観点から明らかにしている。さらに、ASDの障害特性を論理的に整理し、ASD女子に必要な社会的コミュニケーション支援プログラムを開発した。また、ASD女子にとって、RSBが妨害要因であることを示した。これらの点で本論文は、「人間発達環境学」にふさわしい学術的価値があると言える。

３．結論の実証的な裏付け：小５から中２の定型発達児330名とASD児43名を対象に質問紙調査を行い、その結果を元に、思春期のASD女子のニーズを検討している。また、プログラムの効果の測定には、子どもの強さと困難さアンケート（SDQ）チェックテスト及び行動観察を用いて、プログラム実施前後で比較しており、十分なエビデンスに基づいて結論を実証的に裏付けている。

４．論理性：高機能ASDの障害特性と思春期女子の心性について理論的検討を行い、効果的な介入プログラムを開発した。効果の検証も丁寧に行われており論理性を有する研究となっている。

５．先行研究の検証：ASDの障害特性については、日進月歩であり概念も大きく変化してきている。本研究では、診断基準や原因論の変遷を丁寧に整理し、最新の知見までレビューした。さらに、社会的コミュニケーションスキルに関する先行研究も十分に検証している。

なお、本研究に関する業績は以下のとおりである。

西尾祐美子・鳥居深雪（2014）自閉症スペクトラム障害の思春期女子の特徴と支援ニーズの検討－性差の視点から、LD研究、23(3)、 347-359（査読有）

西尾祐美子（2015）思春期の心性に関する研究－親から友人へと変化していく関係性に焦点を当てて　　神戸大学発達・臨床心理学研究、14、29-35（査読有）

西尾祐美子（2014）自閉症スペクトラム障害のある思春期女子に対する支援について－障害特性だけでなく性差も意識した支援の必要性　発達人間学論叢、17、69-76（査読無）

本審査委員会では，以上の点に基づき，本研究は高機能ASDの女子を対象に、思春期における課題と支援ニーズを整理し、支援方法を研究したものであり，社会的コミュニケーションスキル獲得のための介入の可能性について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。よって，学位申請者の西尾祐美子は博士(学術)の学位を得る資格があるものと認める。

レフェリー付きの論文の発表について，記載すること。